

相対最上級形容詞における名詞限定辞の対立の中和 — 名詞限定辞の共通部分の実現形 —

川 島 浩 一 郎

0. はじめに

名詞限定辞記号素の対立が、相対最上級形容詞において中和することがある。たとえば (1) の *le plus cool* や (2) の *le plus nul* に現れうる名詞限定辞記号素の実現形は一つしかない。つまり、これらの相対最上級形容詞にあっては、名詞限定辞記号素が対立する可能性がない。

- (1) *Le mec le plus cool du monde se nomme Tom Ford.*
(Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*,
Collection Folio, 2005, p.297)
- (2) *Oui, papa est le plus nul des pêcheurs.* (Tonino
Benacquista, *Tout à l'ego*, Collection Folio, 1999,
p.139)
- (3) *C'est le plus grand écrivain de sa génération, est-ce
que tu piges...?* (Philippe Djian, *37² le matin*,
Collection J'ai lu, 1985, p.54)

被限定項に対して前置される相対最上級形容詞と被限定項に対して後置される相対最上級形容詞から「*plus*, 名詞記号素の実現形, 形容詞記号素の実現形」を除いた残りの部分は、条件変異体の関係にある。これらの間には、形容詞記号素の実現形が被限定項に対して前置されるか後置されるかの相違しかない。たとえば (1) の *le mec le plus cool* から *mec* と *plus cool* を除去した残りの「*le ... le ...*」と (3) の *le plus grand écrivain* から *plus grand écrivain* を除去した残りの *le ...* は、条件変異体の関係にあると言ってよい。

したがって、被限定項に対して後置される相対最上級形容詞には、名詞限定辞記号素の実現形が含まれると考えられる。たとえば (1) における *le plus cool* の *le* は、名詞限定辞記号素の実現形である。この *le* が、(3) における *le plus grand* の *le* と条件変異体の関係にあるからである。(3) における *le plus grand* の *le* が名詞限定辞記号素の実現形であることは明らかである。

被限定項をもたない相対最上級形容詞は、被限定項に対して後置される相対最上級形容詞と、同等の表意単位の実現形とみなすことができる。この前提があれば、被限定項をもたない相対最上級形容詞には名詞限定辞記号素の実現形が含まれると言える。たとえば (2) の *le plus*

nul が名詞限定辞記号素の実現形を含む (1) の *le plus cool* と同等のステイタスをもつことを前提にすれば、この *le plus nul* にも名詞限定辞記号素の実現形が含まれることになる。

被限定項に対して後置される相対最上級形容詞および被限定項をもたない相対最上級形容詞にあっては、その一部分として現れる名詞限定辞記号素の実現形は一つしかない。したがって、名詞限定辞記号素の対立は中和する。この文脈に現れる *le*, *la*, *les* は、すべての名詞限定辞記号素の共通部分の実現形にほかならない。

1. 表意単位の実現形とその対立

1.1. 表意単位の実現形としての認定基準

発話の切片 (X と記号化する) が表意単位の実現形であるためには、少なくとも次の2条件が満たされることが必要である。(a) 文脈の一点で、X を他の切片 (ゼロ切片を含めて) と入れ換えることができる。(b) この入れ換えによって、発話の知的な意味に変化が生じる。「知的な意味」という用語は、大略、言語共同体の構成員が共有する客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。たとえば (4) と (5) では、*plus* と *jamais* を互に入れ換えることができる。つまり、*plus* と *jamais* が条件 (a) を満たす。また *plus* と *jamais* の入れ換えによって、(4) や (5) の意味に客観的、離散的な変化が生じる。つまり、*plus* と *jamais* が条件 (b) を満たす。したがって (4) の *plus* と (5) の *jamais* は、それぞれの文脈において、表意単位の実現形だと考えてよい。

- (4) *Je ne bois plus.* (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*,
Collection J'ai lu, 2006, p.238)
- (5) *Je ne bois jamais.* (Françoise Dorin, *En avant toutes !*,
Collection Pocket, 2007, p.59)

この基準に依拠しないかぎり、X (発話の任意の切片) が表意単位の実現形であるかそうでないかを明確に判定する手段はない。条件 (a) に反して、かりに (4) の *plus* を他の切片と入れ換えることができないと仮定しよう。この仮定は (4) の *plus* が、発話の他の部分から分離不可能であることを意味する。つまり (4) の *plus* は自立した表意単位の実現形ではなく、*plutôt* における *plu*

と同様、表意単位の実現形の一部分に過ぎないことになる。また条件 (b) に反し、かりに (4) の plus を他の切片と入れ換えることはできるが、この入れ換えによって (4) の知的な意味に変化は生じないでしょう。この仮定のもとでの plus を、表意単位の実現形として認めることはできない。どのような実現形を用いても (plus であろうが jamais であろうが pas であろうが) 発話の知的な意味に変化がないとすれば、それは、je ne bois ... がそもそも表意単位の現れえない文脈だからにほかならない。

(6) Il est midi. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.89)

(7) Il est midi *pile*, [...]. (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.118)

なお X との入れ換え可能性が検討対象となる切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片とは、切片が不在の状態を指す。たとえば (6) にみられるように、(7) の *pile* はゼロ切片と入れ換えることができ、この入れ換えによって (7) の知的な意味に変化が生じる。この観察から (7) の *pile* を、表意単位の実現形として認定することができる。逆に、(6) と (7) の知的な意味が同一であると仮定しよう。この仮定のもとでの (7) の *pile* は、表意機能をもちえない。あってもなくても発話全体の知的な意味に変化が生じない切片が、表意単位の実現形であるはずがない。

1.2. 表意単位の対立を認定する基準

表意単位の複数の実現形 (X, Y と記号化する) が対立すると言われるためには、X と Y が、少なくとも次の 2 条件を満たすことが必要である。(a) X と Y を、文脈の一点で入れ換えることができる。(b) この入れ換えによって、発話の知的な意味に変化が生じる。たとえば (4) の plus と (5) の jamais は (1.1. を参照)、相互に入れ換えることができる。つまり、plus と jamais が条件 (a) を満たす。そして plus と jamais を入れ換えることによって、(4) と (5) の知的な意味に変化が生じる。つまり、plus と jamais が条件 (b) を満たす。したがって (4) の plus と (5) の jamais は、この文脈で対立すると言ってよい。

X, Y が対立するかしらないかについては、文脈ごとの個別の検証が必要である。ある文脈で対立する X, Y が、別の文脈でも対立するとは限らないからである (2.1.1. を参照)。たとえば、ある文脈において疑問代名詞記号素の実現形である [ci] は、別の文脈では関係代名詞記号素の実現形かもしれないし、何らかの固有名詞記号素の実現形かもしれない。あるいは kilogramme の実現形の第一音節かもしれない。疑問代名詞記号素の実現形としての [ci] には、固有名詞記号素の実現形である [david] と対立する文脈がある。しかし、kilogramme の

実現形の第一音節としての [ci] が [david] と対立する文脈は (通常の発話であれば) 存在しない。

1.3. 同一あるいは異なる表意単位の実現形であることを検証する基準

表意単位の複数の実現形 (X, Y と記号化する) が、ある文脈において、同一の表意単位の実現形であるか異なる表意単位の実現形であるかを判定するためには、その文脈において X と Y が対立するか対立しないかを検証する必要がある。すなわち、X, Y が対立する文脈において X と Y は異なる表意単位の実現形である。一方 X, Y が対立しない文脈においては、X と Y を異なる表意単位の実現形だと言うことができない。

X, Y が対立する文脈において、X と Y は異なる表意単位の実現形である。つまり、すでに表意単位の実現形として認定された X, Y が次の 2 条件を満たす文脈があれば、X と Y を当該文脈において異なる表意単位の実現形であるとみなしてよい。(a) X, Y を、文脈の一点で入れ換えることができる。(b) この入れ換えによって、発話の知的な意味に変化が生じる。たとえば (4) の plus と (5) の jamais は、この文脈で対立する (1.2. を参照)。したがって plus と jamais は、少なくとも当該文脈において、異なる表意単位の実現形だと言うことができる。

X, Y が対立しない文脈においては、X と Y を異なる表意単位の実現形だと言うことができない。ある文脈において X と Y が対立しない事例には、次の 3 タイプがある。(i) X と Y が自由変異体の関係にあるため、X と Y が当該文脈において条件 (a) を満たすが、条件 (b) は満たさない。(ii) X と Y が条件変異体の関係にあるため、X と Y が当該文脈において条件 (a) を満たさない。(iii) X と Y が当該文脈で条件 (a) を満たさないため、X と Y がその文脈で同一の表意単位の実現形であるかそうでないかを検証する必要がない。

X, Y が条件 (a) を満たすが条件 (b) は満たさない文脈において、X と Y は同一の表意単位の実現形である。これらは、自由変異体 (文脈の一点で入れ換えが可能な変異体) の関係にあると言われる。たとえば on と l'on を入れ換えても発話の知的な意味に変化がない文脈があれば、その文脈での on と l'on は同じ表意単位の実現形であると考えざるをえない。

X, Y が条件 (a) を満たさない文脈において、X と Y は条件変異体の関係にある可能性がある。たとえば un garçon の un と une fille の une を同じ表意単位の実現形であるとみなしてよいとすれば、それは、これらの un と une の間に意味の同一性ないしは類似性があるからだけでなく、当該文脈において un と une を入れ換えることができないからでもある。これらは、条件変異体 (文脈の一点での入れ換えが不可能な変異体) の関係にあると言われる。

一般に、X、Yが条件(a)を満たさない文脈においては、XとYが同一の表意単位の実現形であるか異なる表意単位の実現形であるかを検証する必要がない。第一に、X、Yのどちらも現れない文脈では、XとYの同一性や非同源性ははじめから問題とならない。存在しないXを存在しないYと比較しても意味がないからである。第二に、XとYのうちX(あるいはY)しか現れない文脈においても、XとYの同一性や非同源性は問題とならない。このような文脈には、比較対象となるY(あるいはX)が存在しないからである。

1.4. 表意単位の実現形の境界画定

同一の発話中で共起する複数の切片(X、Yと記号化する)について、それらの間に表意単位の実現形としての境界があると言うためには、少なくとも次の2条件が満たされることが必要である。(a) X、Yの一方を維持したまま、他方を他の切片(ゼロ切片を含めて)と入れ換えることができる。(b) この入れ換えによって、発話の知的な意味に変化が生じる。X、Yの間に表意単位の実現形としての境界があるのは、この2条件が満たされた場合だけである。X、Yの間に表意単位の実現形としての境界があれば、X(あるいはXを含む切片)とY(あるいはYを含む切片)が両方とも、表意単位の実現形としての基準を満たすはずだからである(1.1.を参照)。たとえばvoici PierreのvoiciとPierreはどちらも、voilà Pierreやvoici Marieにみられるように、他の切片との入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。したがってvoici PierreのvoiciとPierreの間には、表意単位の実現形としての境界があると考えてよい。これらのvoiciとPierreが両方とも、表意単位の実現形だからである。

X、Yのどちらか一方でも条件(a)あるいは(b)を満たさなければ、X、Yの間に表意単位の実現形としての境界はないとみなしてよい。たとえばil le fautのfautは、条件(a)と(b)を満たす。このfautは、il le détesteのように他の切片と入れ換えることができ、この入れ換えによってil le fautの知的な意味に変化が生じる。しかしil le fautのilは、条件(b)を満たさない。このilは、ゼロ切片との入れ換えであれば可能である。つまり条件(a)が満たされる。ただしゼロ切片との入れ換えによって、il le fautの知的な意味に変化が生じるわけではない。したがってil le fautのilとfautの間に、表意単位の実現形としての境界はないと考えてよい。このilを、表意単位の実現形として認定することができないからである。

1.5. 記号素の実現形と連辞の実現形

表意単位の実現形としての境界を内部にもたない表意単位は(1.4.を参照)、記号素と呼ばれる¹。つまり記号素は、複数の表意単位を内部に含まない表意単位である。最小の表意単位と言い換えてもよい。たとえば(8)のprofesseurは、記号素(最小の表意単位)の実現形である。(8)のprofesseurは、他の切片と入れ換えが可能な複数の切片に分節することができないからである。

(8) Je suis professeur, [...]. (Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.393)

(9) Je suis professeur des écoles. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.230)

一方、表意単位の実現形としての境界を内部にもつ表意単位は(1.4.を参照)、連辞と呼ばれる。つまり連辞は、複数の表意単位を内部に含む表意単位である。たとえば(9)のprofesseur des écolesは、記号素の実現形ではなく、連辞の実現形である。(9)のprofesseur des écolesは、professeurやdes écolesを他の切片(maître, de danse, ゼロ切片など)と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。(9)のprofesseurとdes écolesの間には、表意単位の実現形としての境界があると考えてよい。したがって(9)のprofesseur des écolesは、連辞の実現形だと言える。

2. 表意単位の対立の中和

2.1. 対立の中和の概要

2.1.1. 機能的共通部分を備えた実現形が現れる対立の解消

ある文脈で存在する対立が別の文脈で消失する現象を「対立の解消」と総称する。たとえば一方に複数の表意単位の実現形(X、Yと記号化する)が対立する文脈があり、他方にそれらが対立しない文脈があるとしよう。このとき前者の文脈で存在したXとYの対立が、後者の文脈で「解消」していると考えられることができる。後者の文脈で存在しないX、Yの対立が、前者の文脈で「出現」すると考えてもよい。いずれにせよ、X、Yが対立する文脈と対立しない文脈があるという事実にかわりはない。

他の文脈で対立するXとYの機能的な共通部分を備えた実現形が現れうるが、それらの実現形の間に対立が成立しない文脈が存在するとき、後者の文脈においてX

¹ 最小の表意単位は、形態素と呼ばれることもある。しかし、少なくとも日本語においては、形態素よりも記号素のほうが用語として適切である。これらの用語の指示対象が、シニフィアンとシニフィエの両面を備えた言語記号だからである。シニフィアンにしか対応できない「形態」という用語で無理に「記号」を指示しようとすれば、記号という概念との対応関係が不適切になる。また「形態論」と「記号論」が同じものになってしまう。

² 中和についての詳細は、たとえばMARTINET(1968)やAKAMATSU(1988)を参照。

と Y の対立は「中和」と言われる²。中和は、対立の解消の一事例である。X と Y の機能的な共通部分を備えた複数の実現形が対立する文脈（つまり X, Y が対立する文脈）にあっては、対立する実現形が異なる表意単位の実現形とみなされる（1.3.を参照）。一方、X と Y の機能的な共通部分を備えたすべての実現形が互いに対立しない文脈（つまり X, Y の対立に中和が生じる文脈）では、それらの実現形はすべて自由変異体の関係にあるとみなされる（1.3.を参照）。

2.1.2. 対立の中和が成立するための前提条件

X, Y の対立に中和が成立するには、その前提として、X と Y が次の 3 条件を満たす必要がある。(I) X と Y が対立する文脈が存在する。(II) X と Y に機能的な共通部分がある。(III) その機能的な共通部分をもつのが、X と Y だけである。

これらの前提条件が満たされないかぎり、対立の中和は成立しない。第一に、X, Y が対立する事例が存在しなければ、その対立が中和することもない。第二に、X, Y に機能的な共通部分がなければ「X と Y の機能的な共通部分を備えた実現形が現れる」という中和成立の一要件が満たされないことになる。そして X, Y と対立し、かつ X, Y と同じ機能的共通部分をもつ別の Z があるとすれば、この中和は X, Y の対立の中和でなく X, Y, Z の対立の中和だということになってしまう。X, Y の機能的共通部分をもつ実現形が対立しない文脈にあっては、Z もまた X, Y と対立しないからである。

2.2. 対立が中和する単位の共通部分

互いに対立する X, Y に機能的共通部分 (A と記号化する) が存在する場合、X, Y の対立が中和した文脈に現れる A を備えた実現形は、論理的な帰結として、X, Y の機能的共通部分の実現形であると考えざるをえない。共通部分として A をもつ X, Y の対立が無効化することは、A 以外の部分が無効化することと同義だからである。つまり「A + a」と「A + β」あるいは「A + a」と「A」の対立が存在しなくなるとすれば、それは a, β が無視されるからにほかならない。そこに残るのは、共通部分の A だけである。

X, Y が対立しない文脈に A を備えた実現形が現れるとき、その実現形は、X, Y が対立する文脈における X と Y と異なる表意単位の実現形である。X, Y が対立しない文脈においては、A を備えた実現形が、X, Y が対立する文脈における X, Y と対立することはありえない（1.2.を参照）。中和の定義から、X, Y の対立が中和する文脈にあっては、A を備えたすべての実現形に對立がないからである（2.1.1.を参照）。したがって X, Y が対立しない文脈に現れた実現形は、X, Y が対立する文脈における X と異なる表意単位の実現形だと

言うことができない（1.3.を参照）。同様に X, Y が対立しない文脈に現れた実現形は、X, Y が対立する文脈における Y と異なる表意単位の実現形だと言うこともできない（1.3.を参照）。このような実現形を、X あるいは Y のどちらか一方だけと同一の表意単位の実現形であると判定することは不可能である。

3. 相対最上級形容詞における名詞限定辞の存在

3.1. 被限定項をもつ相対最上級形容詞における名詞限定辞

3.1.1. 相対最上級形容詞の前置と後置

被限定項をもつ相対最上級形容詞には、被限定項に対して前置される実現形がある。たとえば (10) における *le pire ennemi* の *le pire*, (11) における *mon pire ennemi* の *mon pire*, (12) における *ce pire ennemi* の *ce pire* は、どれも *ennemi* に対して前置されている。このような最上級形容詞「前置型」名詞連辞を、Le/Mon/Ce plus Adj. N. という記号を用いて表現することにしよう。このタイプの名詞連辞に現れる名詞限定辞には、定冠詞記号素の実現形 (Le と記号化する)、所有形容詞記号素の実現形 (Mon と記号化する)、指示形容詞記号素の実現形 (Ce と記号化する) がある。Adj. という記号は、形容詞記号素 (あるいは形容詞に相当する表意単位) の実現形を表す。N. という記号は、名詞記号素 (あるいは名詞に相当する表意単位) の実現形を表す。

- (10) *Le sucre, ce n'est pas le pire ennemi du mannequin ?*
(Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*,
Collection Le Livre de Poche, 2004, p.177)
- (11) *Tu es mon pire ennemi !* (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*,
Collection Le Livre de Poche, 2005, p.154)
- (12) *Dans mon cas, ce pire ennemi porte un nom : [...].*
(Internet)
- (13) *J'étais le garçon le plus niais du monde.* (Anna Gavalda, *Je l'aimais*,
Collection J'ai lu, 2002, p.31)
- (14) *Je la regarde avec mon air le plus niais possible.*
(Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.143)
- (15) *Et c'est quoi cet endroit le plus beau du monde ?*
(Internet)

被限定項をもつ相対最上級形容詞には、被限定項に対して後置される実現形もある。たとえば (13) における *le garçon le plus niais* の *le plus niais*, (14) における *mon air le plus niais* の *le plus niais*, (15) における *cet endroit le plus beau* の *le plus beau* は、それぞれの被限定項に対して後置されている。このような最上級形容詞「後置型」名詞連辞のなかで、先頭に Le/Mon/Ce を

ともなうものを, Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. という記号で表現することにしよう. 大文字のみを使用したLEは, 相対最上級形容詞の一部分としての le, la, les を表す記号である (4.4. を参照).

3.1.2. Le/Mon/Ce のステイタス

Le/Mon/Ce plus Adj. N. における Le/Mon/Ce は, 記号素の実現形である (1.5. を参照). Le/Mon/Ce の内部には, 表意単位の実現形としての境界がないと考えられる (1.4. を参照). Le/Mon/Ce の一部分だけを, ゼロ切片も含めて, 他の切片と入れ換えることはできないからである (1.1. を参照). たとえば le pire ennemi の le, mon pire ennemi の mon, ce pire ennemi の ce はいずれも, au のような連辞の実現形ではなく (au には前置詞記号素の実現形と名詞限定辞記号素の実現形が含まれる), 記号素の実現形であると考えてよい.

Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. において, 先頭の Le/Mon/Ce と「LE plus Adj. の LE」は, 異なる表意単位の実現形である. 両者の間には, 表意単位の実現形としての境界がある (1.4. を参照). 実際 Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. では, Le/Mon/Ce を他の切片と入れ換えずに維持したまま, LE plus Adj. を他の切片 (たとえば比較級形容詞, 単なる形容詞, ゼロ切片など) と入れ換えることができ, その入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる. また LE plus Adj. を維持したまま, これらの Le/Mon/Ce を他の表意単位の実現形と入れ換えることもでき, その入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる. したがって, たとえば (13) における「le garçon の le」と「le plus niais の le」の間には, 表意単位の実現形としての境界があると考えてよい. この二つの le は, それぞれが別個の表意単位の実現形なのである.

Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. の Le/Mon/Ce は, 名詞限定辞記号素の実現形である. これらが名詞記号素 (あるいは名詞に相当する表意単位) の実現形を限定していることは, 自明であると言ってよい. Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. 全体が名詞連辞だからである. この名詞連辞から N. を除去すれば, Le/Mon/Ce も発話から姿を消す. 実際 (13) における le garçon の le が garçon に対する限定項であることに, 議論の余地はないと思われる.

3.1.3. 相対最上級形容詞にみられる条件変異体の関係

Le/Mon/Ce plus Adj. N. と Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. から両者の共通部分である N. を除いた残りの部分は, 条件変異体の関係にある (1.3. を参照). すなわち Le/Mon/Ce plus Adj. N. から N. を除いた Le/Mon/Ce plus Adj. ... と, Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. から N. を除いた「Le/Mon/Ce ... LE plus Adj.」は, 形容詞記号素の実現形が被限定項に対して前置されるか後

置されるかに条件づけられた変異体の関係にある. たとえば, (16) の le plus adorable garçon と (17) の le garçon le plus adorable を比較してみよう. (16) の le plus adorable garçon から共通部分の garçon を除けば, le plus adorable ... が残る. 同様に (17) の le garçon le plus adorable から garçon を除去すれば「le ... le plus adorable」が残る. これらの le plus adorable ... と「le ... le plus adorable」は, 同一の表意単位の実現形であると考えてよい. そこには, adorable が garçon の前に現れるか後ろに現れるかという出現位置の相違しかない (3.1.1. を参照).

(16) Tu es *le plus adorable garçon* du monde. (Georges Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.111)

(17) Mikel est *le garçon le plus adorable* du monde, tu le sais bien, [...]. (Internet)

したがって Le/Mon/Ce plus Adj. ... と Le/Mon/Ce ... LE plus Adj. から両者の共通部分である plus Adj. ... を除いた残りの部分もまた, 条件変異体の関係にあると考えてよい (1.3. を参照). すなわち Le/Mon/Ce plus Adj. から plus Adj. を除いた残りの Le/Mon/Ce ... と, Le/Mon/Ce ... LE plus Adj. から plus Adj. の除いた残りの「Le/Mon/Ce ... LE ...」は, 条件変異体の関係にある. 変異体の関係にある切片から共通部分を除去すれば, 残った部分もまた変異体の関係にあるはずである. たとえば (16) の le plus adorable ... から plus adorable を除去すれば, le ... という切片が残る. (17) の「le ... le plus adorable」から plus adorable を除去すれば「le ... le ...」という切片が残る. これらの le ... および「le ... le ...」は, 条件変異体の関係にあると考えてよい. 実際 (16) の le plus adorable garçon において le が一つなのは, adorable が garçon に対して前置されているからである. (17) の le garçon le plus adorable に le が二つあるのは, adorable が garçon に対して後置されているからである. つまり「le plus adorable garçon の le」と「le garçon le plus adorable における二つの le」は, 同一の表意単位の実現形にほかならない. これらの中で le の生起数が異なるのは, adorable の出現位置が異なるからに過ぎない.

3.1.4. Le/Mon/Ce による機能の兼任

Le/Mon/Ce plus Adj. N. における Le/Mon/Ce は, Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における「先頭の Le/Mon/Ce」および「LE plus Adj. の LE」を兼任している. Le/Mon/Ce plus Adj. N. の Le/Mon/Ce は, 記号素の実現形である (3.1.2. を参照). また Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. の「先頭の Le/Mon/Ce」と「LE plus Adj. の LE」は, 異なる表意単位の実現形である (3.1.2. を参照). そして Le/Mon/Ce plus Adj. N. における Le/Mon/Ce

は、Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における「Le/Mon/Ce ... LE ...」と条件変異体の関係にある (3.1.3. を参照)。これらの観察からは、Le/Mon/Ce plus Adj.N. における Le/Mon/Ce は、Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における Le/Mon/Ce と LE を兼任していると考えざるをえない。たとえば「le plus adorable garçon の le」は「le garçon le plus adorable における二つの le」を兼任していることになる。

したがって Le/Mon/Ce plus Adj. N. における Le/Mon/Ce は、Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における Le/Mon/Ce であると同時に「LE plus Adj. の LE」でもある。Le/Mon/Ce plus Adj.N. における Le/Mon/Ce は記号素の実現形であるから、それは、Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における Le/Mon/Ce と LE を単純に足し算したものではありえない。たとえば「le plus adorable garçon の le」は、le garçon le plus adorable における「le garçon の le」であると同時に「le plus adorable の le」でもある。

3.1.5. 名詞限定辞の存在証明

Le/Mon/Ce plus Adj. N. における Le/Mon/Ce は、名詞限定辞記号素の実現形である。この Le/Mon/Ce が、Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. において名詞限定辞である Le/Mon/Ce と条件変異体の関係にあるからである (3.1.2. と 3.1.3. を参照)。つまり Le/Mon/Ce plus Adj. N. における Le/Mon/Ce は、相対最上級形容詞の一部分であるだけでなく、名詞記号素 (あるいは名詞に相当する表意単位) の実現形に対する限定項でもある (3.1.4. を参照)。たとえば le pire ennemi の le, mon pire ennemi の mon, ce pire ennemi の ce は、すべて名詞限定辞記号素の実現形と考えてよい。

(18) Deuzio: le philosophe *le plus grand*, le plus beau, le plus fin, on s'en fout. (Internet)

(19) [...] : Michael Stipe est *le plus grand* philosophe contemporain. (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.354)

したがって Le/Mon/Ce N. Le plus Adj. における「LE plus Adj. の LE」は、名詞限定辞記号素の実現形だと考えられる。Le/Mon/Ce plus Adj. N. の Le/Mon/Ce は、Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における「先頭の Le/Mon/Ce」および「LE plus Adj. の LE」と条件変異体の関係にある (3.1.3. を参照)。つまり「LE plus Adj. の LE」は、Le/Mon/Ce plus Adj. N. の Le/Mon/Ce と同一の表意単位の実現形なのである (3.1.4. を参照)。よって Le/Mon/Ce plus Adj. N. の Le/Mon/Ce が名詞限定辞記号素の実現形であれば、それと条件変異体の関係にある Le/Mon/Ce N. LE plus Adj. における「LE plus Adj. の LE」もまた、名詞限定辞記号素の実現形だということにならざるをえない。たとえば (18) における le

plus grand の le は、名詞限定辞記号素の実現形だと言ってよい。この le が (19) の le plus grand philosophe において名詞限定辞記号素の実現形である le と、条件変異体の関係にあるからである。

3.2. 被限定項をもたない相対最上級形容詞における名詞限定辞

相対最上級形容詞には、被限定項をもたない実現形がある。たとえば (20) の le plus calme は属詞の位置にあって、他の表意単位の実現形を直接的に限定していない。一方 (21) の le plus calme は、endroit を直接的に限定している (3.1.1. を参照)。つまり (20) と (21) の le plus calme は、同形ではあるが、出現文脈が異なるという関係にある (1.3. を参照)。

(20) C'est aussi pourquoi cet endroit est *le plus calme* de la ville, on s'y sent comme dans un village. (Internet)

(21) D'ordinaire, cette baraque était l'endroit *le plus calme* de la prison. (Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.188)

(22) Mon père est *allemand* mais ma mère est grecque. (Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.95)

(23) Son père était un juif *allemand*, sa mère italienne. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.256)

ただし「被限定項をもたない相対最上級形容詞」と「被限定項をもつ相対最上級形容詞」を、異なる表意単位であるとする積極的な根拠はない。両者の間に対立がないからである (1.3. を参照)。たとえば (22) において属詞位置にある allemand と (23) において juif を限定している allemand を同一の表意単位の実現形であるとみなすのであれば、(20) と (21) の le plus calme もまた同一の表意単位の実現形であると考えざるをえないだろう。この二つの実現形は形も意味も同じであって、たんに出現する文脈が異なるだけなのである。

この前提を認めるかぎりにおいて、被限定項をもたない相対最上級形容詞の実現形に含まれる le, la, les は、名詞限定辞記号素の実現形だと考えてよい。被限定項をもつ相対最上級形容詞の一部分としての le, la, les が、名詞限定辞記号素の実現形だからである (3.1.5. を参照)。たとえば (20) と (21) の le plus calme が同一の表意単位の実現形であることを前提にしてよければ、(21) の le plus calme の le が名詞限定辞記号素の実現形である以上、それと同一の表意単位の実現形である (20) の le plus calme の le もまた、名詞限定辞記号素の実現形とみなしてかまわない。

3.3. まとめ

相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* は、名詞限定辞記号素の実現形だと考えられる。たとえば (24) と (25) における *la plus importante* の *la* は、名詞限定辞記号素の実現形である。そして (25) の *la plus importante* と (26) の *la plus importante* が同一の表意単位の実現形であることを認めるかぎりにおいて、(26) における *la plus importante* の *la* もまた名詞限定辞記号素の実現形とみなしてよい。

(24) *Toronto est la plus importante ville du Canada et le principal centre financier du pays.* (Internet)

(25) *La tour Eiffel, c'est Paris, bien sûr, la ville la plus importante de ma vie.* (*Elle*, 19 septembre 2005, p.108)

(26) *Avec 12,5 millions d'habitants, la ville est la plus importante du pays, en particulier pendant la journée.* (Internet)

この結論は、相対最上級形容詞が条件変異体の関係にある事例の比較を通して得ることができる。たとえば (24) における *la plus importante ville* の *la plus importante ...* と (25) における *la ville la plus importante* の「*la ... la plus belle*」は、*importante* が *ville* に対して前置されるか後置されるかに条件づけられた変異体の関係にある。よって、*la plus importante ...* と「*la ... la plus importante*」から共通部分の *plus importante* を除いた残りである (24) の *la ...* と (25) の「*la ... la ...*」もまた、条件変異体の関係にある。(24) の *la ...* は名詞限定辞記号素の実現形であるから、それと条件変異体の関係にある (25) の「*la ... la ...*」も名詞限定辞記号素の実現形であると考えられる。したがって (25) と (26) の *la plus importante* が同一の表意単位の実現形であることを前提にすれば、(26) の *la* を名詞限定辞記号素の実現形とみなしてよいことになる。

4. 相対最上級形容詞における名詞限定辞記号素の対立の中和

4.1. 名詞限定辞記号素の対立に中和が成立するための前提条件

名詞限定辞記号素の実現形は、次の3条件を満たす。

(I) 当該の実現形が対立する文脈がある。(II) 当該の実現形の間には、機能的な共通部分がある。(III) その機能的共通部分をもつのが、当該の実現形だけである。以上の3つが、表意単位の対立に中和が成立するための前提条件となる (2.1.2. を参照)。

(27) *Un homme est là.* (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.84)

(28) *L'homme est capable de tout.* (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.286)

(29) *Cet homme est français!* (Internet)

(30) *Tout homme est potentiellement dangereux, [...].* (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.33)

名詞限定辞記号素の実現形には、これらに対立する文脈がある。たとえば (27), (28), (29), (30) などにみられるように、主辞の位置にある *homme* の前では名詞限定辞記号素の実現形を入れ換えることができ、この入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。つまり条件 (I) が満たされる。

名詞限定辞記号素の実現形には、機能的な共通部分がある。これらの実現形には、少なくとも名詞限定辞であるという共通部分があるからである。したがって条件 (II) が満たされる。

名詞限定辞であるという共通部分をもつのは、名詞限定辞記号素の実現形だけである。つまり条件 (III) が満たされる。名詞限定辞として認定されない実現形が、名詞限定辞記号素の実現形と同等の扱いを受ける文脈はあってよい。しかし、名詞限定辞として認定される実現形は、必然的に名詞限定辞記号素の実現形である。

4.2. 相対最上級形容詞後置型名詞連辞における名詞限定辞記号素の対立の中和

相対最上級形容詞「後置型」名詞連辞において、相対最上級形容詞の一部として現れる名詞限定辞記号素の実現形が存在する。たとえば (31) における *le plus intense* は、被限定項の *endroit* に対して後置されている (3.1.1. を参照)。そして (31) の *le plus intense* の一部分としての *le* は、名詞限定辞記号素の実現形と考えてよい (3.1.5. を参照)。

(31) *New York était l'endroit le plus intense de la planète.* (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.182)

相対最上級形容詞「後置型」名詞連辞において (3.1.1. を参照)、相対最上級形容詞の一部として現れる名詞限定辞記号素の実現形は一つしかない。たとえば (31) における *le plus intense* の *le* は、他の名詞限定辞記号素の実現形と入れ換えることができない。つまり、この *le* は他の名詞限定辞記号素の実現形と対立する可能性をもたない (1.2. を参照)。

したがって被限定項に対して後置される相対最上級形容詞において、名詞限定辞記号素の対立は中和する (2.1.1. を参照)。この文脈に現れうる名詞限定辞記号素の実現形が、他の名詞限定辞記号素の実現形と対立する可能性がないからである (1.2. を参照)。なお名詞限定辞記号素は、それらの間に対立の中和が成立するための前提条件も満たしている (4.1. を参照)。

4.3. 被限定項をもたない相対最上級形容詞における名詞限定辞記号素の対立の中和

被限定項をもたない相対最上級形容詞は、被限定項をもつ相対最上級形容詞と同一の表意単位の実現形とみなすことができる(3.2.を参照)。たとえば(32)の *le plus intelligent* は、(33)の *le plus intelligent* と同一の表意単位の実現形とみなしてよい。少なくとも、これらを異なる表意単位とする積極的な論拠はない。

(32) *Ainsi donc, [...], tu es le plus intelligent de tous !*
(Georges Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.67)

(33) *Sherlock Holmes a toujours été l'homme le plus intelligent de tous... jusqu'à ce jour.* (Internet)

この前提を認めるかぎり、被限定項をもたない相対最上級形容詞において、その一部分として現れる名詞限定辞記号素の実現形が存在すると言うことができる(3.2.を参照)。たとえば(32)における *le plus intelligent* は属詞の位置にあって、他の表意単位の実現形を限定していない。この *le plus intelligent* の一部分としての *le* は、名詞限定辞記号素の実現形と考えてよい。

被限定項をもたない相対最上級形容詞において、その一部分として現れる名詞限定辞記号素の実現形は一つしかない。たとえば(32)における *le plus intelligent* の *le* は、他の名詞限定辞記号素の実現形と入れ換えることができない。つまり、この *le* には他の名詞限定辞記号素の実現形と対立する可能性がない(1.2.を参照)。

したがって被限定項をもたない相対最上級形容詞において、名詞限定辞記号素の対立は中和する(2.1.1.を参照)。この文脈に現れる名詞限定辞記号素の実現形が、他の名詞限定辞記号素の実現形と対立する可能性がないからである(1.2.を参照)。なお名詞限定辞記号素は、それらの間に対立の中和が成立するための前提条件を満たしている(4.1.を参照)。

4.4. 名詞限定辞記号素の共通部分の実現形

相対最上級形容詞において、名詞限定辞記号素の対立が中和する文脈がある(4.2.と4.3.を参照)。たとえば(34)や(35)における *le plus beau* の *le* を、他の名詞限定辞記号素の実現形と入れ換えることはできない。したがって(34)や(35)における *le plus beau* の *le* は、名詞限定辞記号素の対立が中和する文脈に現れた名詞限定辞記号素の実現形だということになる。

(34) *Il veut être le papa le plus beau du monde...*
(Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.322)

(35) *Tibère est de loin le plus beau des trois.* (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.47)

名詞限定辞記号素の対立が中和する文脈に現れる名詞限定辞記号素は、すべての名詞限定辞記号素の共通部分の実現形である。名詞限定辞記号素には、少なくとも、名詞限定辞記号素であるという機能的共通部分がある(4.1.を参照)。名詞限定辞記号素の対立が中和する文脈には、名詞限定辞記号素の機能的共通部分だけしか現れえない(2.2.を参照)。したがって、たとえば(34)や(35)における *le plus beau* の *le* は、名詞限定辞記号素の共通部分の実現形だということになる³。

5. まとめ

被限定項に対して後置される相対最上級形容詞および被限定項をもたない相対最上級形容詞において、名詞限定辞記号素の対立は中和する。たとえば(36)の *le plus solaire* や(37)の *le plus heureux* における *le* は、他の名詞限定辞記号素の実現形と入れ換えることができない。これらの相対最上級形容詞にあっては、名詞限定辞記号素の対立が存在しないのである。

(36) *Dix ans est le moment le plus solaire de l'enfance.*
(Amélie Nothomb, *Robert des noms propres*, Collection Le Livre de Poche, 2002, p.77)

(37) *Je suis le plus heureux des hommes.* (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.320)

名詞限定辞記号素の対立が中和する文脈に現れる名詞限定辞記号素は、すべての名詞限定辞記号素の共通部分の実現形である。音韻対立の中和における「原音素」をまねて、名詞限定辞記号素の共通部分を「原名詞限定辞記号素」と呼ぶことにしよう。たとえば(36)における *le plus solaire* の *le* や(37)における *le plus heureux* の *le* は、通常の定冠詞記号素の実現形ではなく、原名詞限定辞記号素の実現形だということになる。

³ 名詞限定辞記号素の共通部分(原名詞限定辞記号素)については、川島(2011a)、川島(2011b)、川島(2013)を参照。

参考文献

- AKAMATSU, Tsutomu (1988), *The Theory of Neutralization and the Archiphoneme in Functional Phonology*, John Benjamins.
- KAWASHIMA, Koichiro (2010), “Neutralisation en japonais. Une application de la théorie d’André Martinet au Japon”, Klein, J.R. et F. Thyron (eds), *Les études françaises au Japon. Tradition et renouveau*, Presses Universitaires de Louvain, 119-126.
- 川島浩一郎 (2011a) 「形容詞の相対最上級における冠詞 — 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 —」『福岡大学人文論叢』43-2, 445-457.
- 川島浩一郎 (2011b) 「所有代名詞における冠詞 — 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 —」『福岡大学人文論叢』43-2, 603-616.
- 川島浩一郎 (2013) 「定冠詞の諸用法の成立基盤 — 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 —」『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題 IV』三修社, 183-198.
- MARTINET, André (1955), *Économie des changements phonétiques*, A.Francke.
- MARTINET, André (1968), “Neutralisation et syncrétisme”, *La Linguistique* 4-1, 1-20.
- MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier.
- MARTINET, André (1985), *Syntaxe générale*, Armand Colin.